

高齢者への在宅酸素療法導入の看護に関する研究の文献レビュー

平井佳代 堀田涼子 今野あかね 吉田直美
(Kayo HIRAI, Ryoko HOTTA, Akane KONNO, Naomi YOSHIDA)

【要約】

《目的》高齢者へのHOT導入の看護に関する文献についてレビューを行い、動向を整理し今後の研究課題を明らかにする。

《方法》医学中央雑誌web版Ver5で「在宅酸素療法」「導入」「看護」「高齢者」or「老年」をキーワードとして検索し78件が抽出された。抽出された文献のうち標題、抄録を精読し、12件を研究対象とした。

《結果》HOTを導入した患者の思いや日常生活を明らかにすることを目的とした研究が9件見られた。これらの研究では、主に半構造的面接法、質的帰納的分析が用いられていた。さらに研究の内容について分類すると、患者の思いや受容の状況など精神面について6件、療養体験について3件であった。

《結論》高齢者のHOT導入ではチェックリストの使用や、精神面を含めた定期的な介入が有効であることが示されている。高齢者へのHOTの看護の課題として高齢者の特徴を踏まえた看護の方法を検討することが課題であると考えられる。生活の実態やその思いを知ることで、HOT導入の看護の示唆を得ることや実践した看護の振り返りになっていた。

キーワード：高齢者、在宅酸素療法、導入、看護

I. はじめに

わが国においては在宅酸素療法（home oxygen therapy；以下HOT）は1985年に健康保険が適応され、その患者数は急速に増加し、現在患者数は17万人に達している。HOTを行う患者の疾患は慢性閉塞性肺疾患（以下、COPD）が45%と最も多いと報告されており¹⁾、COPDは慢性に肺機能の閉塞性状態を有する高齢者に多い病態である²⁾。実際に、HOTを使用する患者の平均年齢は73.8歳¹⁾、新規導入者は、70歳台が約38%、80歳以上が約16%程度³⁾といわれており、高齢者が多くみられる。

HOTは住み慣れた自宅で療養を行いつつ、趣味や

生活習慣、社会活動を継続し、患者の生活の質を高めるための医療であり⁴⁾、導入後、転帰先でも継続していくことが必要となる。近年の医療改革による在院日数の短縮化により、HOT導入のための十分な指導を行う時間の確保が困難になっていることが推察され、時間的制約がある中でも、HOTを生活に取り入れるための効果的な指導が求められている。HOTは酸素機材の操作だけではなく、労作による呼吸苦を軽減するための動作を習得することや、HOTを行いながら生活が継続できるよう、日常生活の再編が必要となる。さらに、鼻カニューレを使用するために生じるボディイメージの変容は、社会活動にも影響を及ぼす精神的な変化が予測される。

ひらいかよ : 目白大学看護学部看護学科
ほったりょうこ : 目白大学看護学部看護学科
こんのあかね : 目白大学看護学部看護学科
よしだなおみ : 目白大学看護学部看護学科

高齢者は、難解な説明や機器の操作が不得手であるため、説明不足や誤動作の危険が懸念されることや、高齢者では酸素濃縮装置に比べて呼吸同調装置付きの携帯用酸素ボンベの誤使用が少なくない⁵⁾ことが報告されている。高齢者の特徴として、流動性知能の低下や認知力の低下があると考えられ、HOT導入による新しい生活様式を容易に取り入れることが困難になりやすいことが想定される。そのため、高齢者個々にこれまで培ってきた生活習慣の継続のための生活再編や、HOTの導入によって新しい生活習慣を習得するためには看護の実践において工夫が求められる。また、HOT導入後、転帰先でも継続してHOTを行うための退院支援や、多職種連携においてもHOT導入時の高齢者への看護は重要であると考えられる。

本稿では、高齢者へのHOT導入の看護に関する文献についてレビューを行い、動向を整理し今後の研究課題を明らかにすることを目的とする。

II. 目的

高齢者へのHOT導入の看護に関する文献についてレビューを行い、動向を整理し今後の研究課題を明らかにする。

III. 研究方法

1. 対象文献の抽出

文献データベースとして医学中央雑誌web版Ver.5を用いて検索を行い2021年8月25日の時点での検索結果とした。検索年は健康保険が適応され、その患者数は急速に増加した1985年以降から2021年とした。「在宅酸素療法」「導入」「看護」「高齢者」or「老年」をキーワードとして検索し78件であった。抽出された文献のうち看護師が高齢者のHOT導入を行った研究と看護師が関わった患者の療養体験を選出基準とし、標題、抄録を精読し、HOT導入に関連のない文献、看護の研究ではない文献、解説及び特集を除く、12件を研究対象とした。

2. 分析方法

1) 研究の動向についての分析

対象文献を年次推移に沿って抽出された文献の発行

年ごとに分類した。

2) HOT導入高齢者の看護に関する内容の分析

対象文献を精読し、研究目的を看護の評価と患者の療養体験の2つに分けて分析を行った。患者の療養体験の研究についてはさらに精神面と生活実態に分けられた。

3. 倫理的配慮

本研究では、すでに公表された文献を使用した。使用にあたっては著作権法に則り、著作権を侵害しないよう、原文を引用した。

IV. 結果

1. 研究の動向 (表1)

研究対象となった論文は12件であり、発行年は1997年～2019年であった。発行件数は1997年に1件、2001年に1件、2003年に1件、2006年に1件、2009年に3件、2012年に1件、2013年に1件、2017年～2019年に3件であった。3年間の間隔で1、2本の研究が継続的に報告されている。

研究の目的別に概観すると、2001年から2009年には、HOTを導入した患者の思いや導入後の日常生活を明らかにする目的の研究が9件、看護の評価に関する研究が3本見られた。

また、標題または目的に高齢者と明記された論文は3件であった。研究対象論文のうち、5件の論文が成人看護学分野で発表されていた。

研究方法は、質的研究が7件、量的研究が1件、事例研究が2件、質的研究および量的研究の混合研究が1件であった。

2. 高齢者の療養体験についての研究 (表2)

2001年以降、HOTを導入した患者の思いや日常生活を明らかにすることを目的とした研究が9件見られた。これらの研究では、主に半構造的面接法、質的帰納的分析が用いられていた。さらに研究の内容について分類すると、患者の思いや受容の状況など、精神面についての内容が5件、生活の実態についての内容が4件であった。精神面についての研究は大西らの「在宅酸素療法患者の受容過程」⁶⁾をもとに考察された文献が2件あり、いずれも大西らの概念に当てはまると

考察されていた。生活の実態についての内容は、HOT導入後による生活の変化であり、屋内で行う趣味があるが、HOT導入後諦めたこと⁷⁾や、周囲の視線が気になり携帯酸素の持ち運びも大変で外出が減った⁸⁾など、余暇活動に対する変化が報告されていた。

3. 看護の評価を目的とした研究 (表3)

看護師が行った看護の評価に関する研究は、2001年に1件、2012年以降に2件見られた。実践された看護の内容は、教育パンフレットやDVDを用いた指導、不安の傾聴や共感、チェックリストを用いた指導であり、いずれも患者の理解度に合わせて繰り返し実践されており、効果を得られたと報告されている。評価の基盤とされていたのは、6種類の気分尺度を同時に測定できる心理尺度であるPOMS、ドロシー・ジョンソンの行動システムモデル、自作のインタビューガイドであり、3件の文献ですべて異なっていた。

V. 考察

1. 高齢者へのHOT導入に関する看護の研究の動向

1997～2019年で年に1～3件で大きな変動は見られなかった。酸素機器の軽量化などデバイスの進化はあっても、鼻カニューレなどを使用して酸素を吸入することやポンペを持ち歩く必要があるといった、HOT自体に大きな変化がないことから、文献数の発行数に大きな変化がないものと考えられる。研究方法は質的研究が多く、患者本人からの看護に対する評価や、HOTにおける患者の精神状況、生活状況についての調査がされており、HOTの看護では患者に寄り添った支援が必要だと常に認識されていると考えられる。

本研究の分析の対象文献となった文献のうち、標題または目的に高齢者と明記されたものは3件であった。また、研究対象者は高齢者であるが、成人看護学領域に掲載された論文が5件見られた。これらのことから、HOT導入に対する看護の対象が高齢者であっても、高齢者に対する看護という認識より慢性疾患に対する看護であるという看護師の認識が強いのではないかと考えられる。また、この3件の文献では、HOT導入の際には患者・配偶者の趣味や生活習慣、社会活動を確認しながら、可能な限り今までのライフスタイルを壊さずQOLを維持できるようなかわりが必要

である⁹⁾ことや、個々の患者の不安、疑問を明確にし、実際に技術の修得に時間をかけ、患者のペースで指導を繰り返す¹⁰⁾重要性、社会資源の活用¹¹⁾について述べられており、高齢者の特徴を踏まえた看護の必要性が報告されている。高齢者へのHOTの看護の課題として高齢者の特徴を踏まえた看護の方法を検討することが課題であると考えられる。

2. 高齢者のHOT導入の看護

高齢者へのHOT導入では、チェックリストやパスを用いて時間をかけて繰り返し指導するとともに、自己管理のための日誌などを用いた定期的な指導と快適感や満足感なども含めた使用状況のチェックが推奨され⁵⁾ている。

看護の評価を目的とした文献においても、「酸素機器に触れること」を繰り返した結果、機器に慣れ、操作方法を習得できたという自信につながっている¹²⁾ことや、時間をかけ、患者のペースで指導を繰り返したことによって視覚的に見るだけでは軽減しなかった不安が軽減された¹³⁾ことが報告されている。これらのことから、チェックリストの使用や、精神面を含めた定期的な介入が有効であることが示されていると考えられる。

チェックリストについて、本研究での対象文献ごとにチェックリストの内容は異なっており、施設ごとに異なるチェックリストが存在すると考えられる。チェックリストが統一され転帰先でも継続して使用できるものであれば、継続看護のための有用なツールとなると推察される。HOTの指導システムについて検討を行った丸橋らは、チェックリストを独自に作成しておりHOT導入患者のHOT自己管理能力修得に向けた指導の質向上に向け、指導内容の優先順位の統一、さらには患者の反応、理解度を確認しながら、個別性を捉えた指導が行えるように活用していく必要があると述べている¹⁴⁾。そのため、患者の理解の到達度の評価にはチェックリストは有用であると考えられるが、患者個々の反応や理解度をともに、チェックリストの内容をどのように伝えていくのかという創意工夫が高齢者に対するHOT導入の看護について最も重要であると考えられる。斎藤らは、独自に作成したチェックリストを用いたHOT導入の指導の効果について、視覚・体感にアプローチした退院指導は患者の行動変容を促すことに有効である¹²⁾と報告している。

どのような指導が有効であったか患者からの言葉で評価することにより、チェックリストの内容の伝え方の工夫について具体的な方法が明らかとなったといえる。チェックリストの項目ごとに、どのような工夫が有効であったかという事例を積み上げていくことで、看護実践の示唆につながると考えられる。

3. 高齢者のHOTの療養体験についての研究

療養体験に関する研究では、HOT導入後の在宅での生活の実態調査¹⁵⁾、受容過程における患者の精神状態の把握^{16~19)}、実践した看護を振り返り、理論に基づく検討がされていた。HOTは、転帰先での継続が必要であるが、看護師は、入院中の患者が退院後の生活の様子を実際に目にする機会はなく、患者が退院後にHOTを継続しながらどのような生活をするのかイメージが付きにくいいため、実態調査が行われていたと考えられる。生活の実態やその思いを知ることで、HOT導入の看護の示唆を得ることや実践した看護の振り返りになっていると考えられる。

また、患者のHOTに対する思いや受容など精神状態についての研究が行われており、すべての患者が受容に至るわけではなく、HOTは社会的に自分の価値を下げるものであると認識している¹⁷⁾ことや病気と向き合い、自己の気持ちに折り合いをつけて¹⁰⁾生活していることが明らかにされている。

療養体験に関する研究がされる背景として、日々の看護を行う中で高齢者のペースに合わせて寄り添った看護を提供する必要性を実感しているものと考えられる。西田らは、高齢者は健康管理行動が苦手であり、機能を維持するために急性増悪の予防や早期発見の知識を患者や家族に提供することが必要²⁰⁾と示唆している。在宅での生活においてはHOTが家族へもたらず影響も重要であると考えられる。森泉らは、HOT家族を含めた調査を行い、HOT導入において、患者の配偶者は「入浴時は心配だから見に行くし、顔なじみも支えてくれる」⁷⁾などの思いがあることを報告している。退院を見据えた看護を提供するうえでも家族への支援の示唆を得るための研究が今後の課題であるものと推察される。

高齢者への看護では、たとえ疾患や障害を抱えても高齢者がいきいきと暮らすことができるように、その人のもてる力を大切に支援すること²¹⁾が重要であり、HOT導入による生活や精神的な変化に対する介入は

高齢者とのQOLの維持向上のために不可欠である。研究対象を意図的に高齢者としているHOT導入に関する研究は少なく、今後の課題であると考えられる。

VI. 結論

1. 高齢者と明記された文献では、HOT導入の際には患者・配偶者の趣味や生活習慣、社会活動を確認しながら、可能な限り今までのライフスタイルを壊さずQOLを維持できるようなかかわりが必要であることや、個々の患者の不安、疑問を明確にし、実際に技術の修得に時間をかけ、患者のペースで指導を繰り返す重要性、社会資源の活用について述べられており、高齢者の特徴を踏まえた看護の必要性が報告されていた。高齢者へのHOTの看護の課題として高齢者の特徴を踏まえ看護の方法を検討することが課題であると考えられる。さらに、HOT導入に対する家族の思いや家族を含めたHOT導入の支援の方法について検討することが課題として考えられる。
2. 高齢者のHOT導入ではチェックリストの使用や、精神面を含めた定期的な介入が有効であることが示されていると考えられる。
3. 生活の実態やその思いを知ることで、HOT導入の看護の示唆を得ることや実践した看護の振り返りになっていた。看護師自身が、患者が退院後にHOTを継続しながらどのような生活をするのかイメージすることが必要と推察された。
4. HOT導入の看護として、チェックリストの項目ごとにどのような工夫が有効であったかという事例を質的研究によって積み上げていくことで、高齢者に対する看護実践の示唆につなげることが今後の課題である。

【文献】

- 1) 日本呼吸器学会入生理専門委員会在宅呼吸ケア白書ワーキンググループ：在宅呼吸ケア白書。3、社団法人日本呼吸器学会（2010）
- 2) 鳥羽研二、他：系統看護学講座 専門分野Ⅱ老年看護 病態・疾患論。182、株式会社医学書院（2020）
- 3) 公益財団法人長寿科学振興財団：在宅酸素療法（HOT）。掲載日2019年2月1日。<https://www.tyojyu.or.jp/net/byouki/manseiheisokuseihaishikkan/zaitakusansoryoho.html>（閲覧日2021年9月2日）
- 4) 池多文子：在宅酸素療法（HOT）導入患者の入退院支援にける多職種連携とジェネラリストナースの役割：呼吸・循環・脳 実践ケア。41-2、37（2019）
- 5) 日本呼吸ケア・リハビリテーション学会 酸素療法マニュアル作成委員会日本呼吸器学会 肺生理専門委員会：酸素療法マニュアル。日本呼吸ケア・リハビリテーション学会、77（2017）
- 6) 大西 みさ、山口 桂子、片岡 純：在宅酸素療法患者の受容過程。日本看護研究学会雑誌 27巻5号39-48（2004）
- 7) 森泉 誠、佐藤 さやか、宮澤 早織、中山 春香、赤井香織、島田 明美、山越 かおり：長期酸素投与療法を導入した高齢者の現状と指導の課題長野県看護研究学会論文集（1882-8019）37回 104-107（2017）
- 8) 高齢者の在宅酸素療法導入後の課題と看護婦の役割 個別データ表による生活状況調査を行って（一般）三井 稲子、小西 民恵、井上 ひとみ日本看護学会集録 28回老人看護、5-7（1997）
- 9) 森泉誠、佐藤さやか、宮澤早織、中山春香、赤井香織、島田明美、山越かおり：長期酸素投与療法を導入した高齢者の現状と指導の課題。長野県看護研究学会論文集37回、104-107（2017）
- 10) 西岡佐智子、宮内寿実、松岡綾子：コントロール良好な長期在宅酸素療法患者の在宅酸素療法に対する感情。日本看護学会論文集:成人看護II39号、158-160（2009）
- 11) 高齢者の在宅酸素療法導入後の課題と看護婦の役割 個別データ表による生活状況調査を行って（一般）三井稲子、小西 民恵、井上 ひとみ日本看護学会集録 28回老人看護、5-7（1997）
- 12) 斎藤 幸代、高宮 美和、田村 綾子、西脇 沙南、吉口 奈穂美、尾崎 もも子、早川 みつほ：チェックリストを活用し、視覚・体感に訴えた退院指導の有用性—患者の行動変容に焦点をあてて—。日本看護学会論文集:成人看護II42号、143-146（2012）
- 13) 佐々木 陽子、横田 真理子、佐々木 雪恵、藤原 桂子、小幡 善子：高齢者の在宅酸素療法導入への援助：日本看護学会論文集:老人看護31号、152-154（2001）
- 14) 丸橋 朋恵、小林 智洋、森 僚子：HOT導入患者のHOT自己管理能力修得に向けた指導システムを活用した指導の効果、日本看護学会論文集:慢性期看護50号 194-197（2020）
- 15) 浅野裕香、沖英理加、数家由子、野瀬智代、藤原有希子、大川宣容：在宅酸素療法を必要としている人の生活調整行動 今の生活を維持することに焦点を当てて。日本看護学会論文集:成人看護II39号、341-343（2009）
- 16) 土田和代、池田恵美、千石尚子、清野華代、長尾奈央子、小野香、森本千恵子：在宅酸素療法患者のボディイメージを受容する過程で生じる問題点。日本看護学会論文集:成人看護II（1347-8206）33号、72-74（200）
- 17) 今戸美奈子、土居洋子、池田由紀、森路芳子、近藤勝美、石原英樹：在宅酸素療法を予期したCOPD患者の感情。日本呼吸管理学会誌15（4）、635-640（2006）
- 18) 藤澤詠子、山田隆子：入退院を繰り返すCOPD患者におけるHOTの自己管理を支える療養体験。日本看護学会論文集:成人看護II43号、55-58（2013）
- 19) 藤井詩織、室山由美子、堀有香、大西美佳：在宅酸素療法（HOT）導入患者の受容過程と看護介入。中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌13巻、207-210（2018）
- 20) 西田彩、種谷美津香：在宅酸素療法新規導入後の日常生活の実態調査 退院後初回外来受診時の質問紙調査より日本看護学会論文集:地域看護39号、191-193（2009）
- 21) 山田律子：生活機能から見た老年看護過程+病態・生活機能関連図。医学書院、6（2016）

（2021年10月1日受付、2021年11月22日受理）

表1 対象文献の概要

文献ID	標題	著者(発行年)	掲載書籍	研究目的
1	高齢者の在宅酸素療法導入後の課題と看護婦の役割個別アンケート表による生活状況調査を行って	三井 穂子、他(1997)	日本看護学会集録28 回老人看護	HOTの効果を得られていたかを評価し、看護婦の今後の生活指導のあり方と役割を明らかにする。
2	高齢者の在宅酸素療法導入への援助	佐々木 陽子、他(2001)	日本看護学会論文 集：老人看護	高齢者のHOTに対する不安や疑問点を知り、個々の価値観に沿った指導のあり方を検討する。
3	在宅酸素療法患者のポデアイテムージュを受容する過程で生じる問題点	土田 和代、他(2003)	日本看護学会論文 集：成人看護II	ポデアイテムージュの変容について、患者がどのようなかを知っているかを知るため面接を行った。その結果、変容したポデアイテムージュを受容する過程で生じる問題点が明らかになったため報告する。
4	在宅酸素療法を予期したCOPD患者の感情	今戸 美奈子、他(2006)	日本呼吸管理学会誌	COPD患者で近い将来LTOT導入が予測されている患者が抱いているLTOTに対する感情を探索する。
5	在宅酸素療法新規導入後の日常生活の実態調査 退院後初回外来受診時の質問紙調査より	西田 彩、他(2009)	日本看護学会論文 集：地域看護	HOT導入後に退院した患者の日常生活状況及び健康管理に対する意識を調査・分析することで患者の問題点を明確にし、継続看護の必要性を導き出す。
6	在宅酸素療法を必要としていてる人の生活調整行動の生活を維持することに焦点を当てて	浅野 裕香、他(2009)	日本看護学会論文 集：成人看護II	どのような生活調整行動をとっているのかを明らかにし、HOTの必要性がありながら生活を送る患者の状況の捉えや行動を理解し、療養法の継続や患者の主体的な行動を支援する看護に示唆を得る。
7	コントロール良好な長期在宅酸素療法患者の在宅酸素療法に対する感情	西岡 佐智子、他(2009)	日本看護学会論文 集：成人看護II	コントロール良好なLTOT患者がLTOTについて初めて持っていた感情と現在の感情を知り、LTOTに否定的感情をもった患者への看護の示唆とする。
8	チェックリストを活用し、視覚・体感に訴えた退院指導の有用性 患者の行動変容に焦点をあてて	斎藤 幸代、他(2012)	日本看護学会論文 集：成人看護II	独自に作成したチェックリストを活用し、視覚や体感に訴える退院指導方法がHOT患者の行動変容に結びついているかどうか明らかにする。
9	入退院を繰り返すCOPD患者におけるHOTの自己管理を支える療養体験	藤澤 詠子、他(2013)	日本看護学会論文 集：成人看護II	入退院を繰り返すCOPD患者におけるHOTの自己管理を支える療養体験を明らかにする。
10	長期酸素投与療法を導入した高齢者の現状と指導の課題	森泉 誠、他(2017)	長野県看護研究会 論文集	LTOTを導入した高齢者の現状と指導の課題が明らかになる。
11	在宅酸素療法(HOT)導入患者の受容過程と看護介入	藤井 詩織、他(2018)	中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究会誌	HOT導入に葛藤があった患者の受容過程を明らかにし、患者と家族に対してどのような看護介入が必要であるか明確になったため報告する。
12	在宅酸素療法を必要とする患者・家族への不安軽減のための支援 教育パンフレットを用いた指導	高橋 実来(2019)	奈良県西和医療センター看護学雑誌	ドロシージョンスンの理論を用いHOT患者と家族の不安軽減への援助が行えたかどうかを検討する。

表2 対象文献の概要

文献ID	課題	対象者	研究方法	結果
1	高齢者の在宅酸素療法導入後の課題と看護婦の役割 個別データ表による生活状況調査を行って	平均年齢76歳。HOT使用中で、外来通院している12名	量的研究	HOTの必要性は全員が理解していた。83.6%の患者が、日常生活指導の内容が不十分であったと回答した。屋内で行う趣味活動を50%の患者が行っていたが、HOT導入後諦めた活動がある患者もあった。酸素吸入を行った呼吸苦が軽減した患者は16.4%であった。
3	在宅酸素療法患者のポデアイメージを受容する過程で生じる問題点	過去5年間にHOTを導入し、現在外来通院中。68歳男性、67歳女性、58歳男性、79歳男性	質的研究	面接を行った結果、全員がNANDAのポデアイメージの障害の診断指標の小項目に当てはまった。カヌラの装着に対して異常に気にしている患者や、過去にはカヌラを装着する自分自身を否定し、異常なほど気をとられていた患者が現在ではカヌラを装着することに肯定的であるなど、すべての患者ポデアイメージを受容していくとは限らないことが明らかとなった。
4	在宅酸素療法を予期したCOPD患者の感情	COPDで、今後1年程度の期間にLTOTが必要と医師から説明されていた64～83歳の男性14名	質的研究	LTOT導入に対する感情、導入後を予測した生活に対する感情、LTOTをして生きることに対する感情に分けられ、計12カテゴリーを抽出した。うち11カテゴリーは【導入が明確にならない恐怖】など否定的な感情、1カテゴリーは肯定的な感情であった。
5	在宅酸素療法新規導入後の日常生活の実態調査 退院後初回外来受診時の質問紙調査より	平均年齢72.9歳(±7.66歳)で在宅酸素療法(HOT)新規導入患者と家族43人	量的研究	73歳未満と73歳以上の2群に分けて比較した結果、73歳未満では、呼吸リハビリテーションを受ける患者は【酸素療法が必要かわかるか】【排泄時は息を吐く時にいきむむきができるか】などに対し1%水準で《できる》が優位であった。健康管理行動については73歳未満の群が5%水準で優位に《わかる》と回答した。
6	在宅酸素療法を必要としている人の生活調整行動 今の生活を維持することに焦点を当てて	在宅酸素療法(HOT)導入後6ヵ月以上経過し症状が安定している患者5名(60～80歳台)	質的研究	HOTを必要としている人は【今の体調を保つ】【編み出した身体の負担にならない方法を実践する】という生活調整行動をとり、今の生活を維持していた。【今の体調を保つ】は〈体調を維持するために運動する〉など3つの中カテゴリーで構成された。【編み出した身体の負担にならない方法を実践する】は〈息苦しくならないように意識して自分自身に呼吸をする〉など6つの中カテゴリーで構成された。
7	コントロール良好な長期在宅酸素療法患者の在宅酸素療法に対する感情	対象者は慢性呼吸不全患者4名。年齢は37-72歳の男性3人と女性1人で、LTOT歴は3-7年であった	質的研究	初めにもついていた感情は、傾わしき、必要性を感じない、羞恥心、恐怖心、孤独感、生きるため、効果を実感、であった。現在持っている感情は、頼る気持ち、効果を感じる、慣れ、生きるため、必要性を感じる、感謝の気持ち、安心感、あきらめ、不便さ、であった。
9	入退院を繰り返すCOPD患者におけるHOTの自己管理を支える療養体験	HOT安定期にあり、一旦退院となるが、呼吸状態増悪し再度入院となった患者。40代1名70代2名60代1名	質的研究	《HOTに対する抵抗感》《苦しいくらいなら早く死んで楽になりたいと思う》《呼吸苦や死の連想から病状を認識する》《HOTを命綱と思う》5つのカテゴリーが抽出された。
10	長期酸素投与療法を導入した高齢者の現状と指導の課題	認知症がなく、LTOTを自己管理できる後期高齢者2名(80歳代後半、特発肺線維症、80歳代前半、男性、肺出血、COPD)	質的研究	配偶者同席のもと面接を行い、計13カテゴリーが抽出された。患者からは【酸素導入前は昔の仕事仲間と会ったり同窓会や温泉にも行ったりしていた】【濃縮器の取り扱いへの不安と延長チューブを引きずることへの不快感】など7カテゴリーが挙げられた。配偶者からは【付けていると安心感があるから大変だとは思いうけど付けてほしい】など6つのカテゴリーが抽出された。
11	在宅酸素療法(HOT)導入患者の受容過程と看護介入	HOT導入が必要であり、導入に葛藤があった70歳代女性	事例研究	呼吸法などについてパンフレットを作成し、患者、家族に指導を行った。プロバイダーに協力をえて酸素ボンベのバッグを自己決定することで気に食わないが少し納得した様子が見られた。酸素によって呼吸苦の軽減から酸素の必要性を感じるようになった。酸素を使用しない様子や否定的な言動が見られたが、寄り添った対応を行うことで不安が軽減している様子が見られた。

表3 看護の評価を目的とした文献

文献ID	標題	対象者	研究方法	結果
2	高齢者の在宅酸素療法導入への援助	HOT導入患者平均年齢68.9 ± 7歳の男女	質的研究	ビデオによる教育直後にPOMS(気分尺度)による評価の比較を行った結果、有意差は認められなかったが上昇傾向が見られた。不安の内容については身体、経済、家族に関するものが挙げられた。チャットクリスタとビデオの活用を行い、個々の課題に沿って繰り返し指導を行い、退院後の生活がイメージできたことで安心感ややる気が持てたという結果が得られた。
8	チャットクリスタを活用し、視覚・体感に訴えた退院指導の有用性 患者の行動変容に焦点をあてて	60歳代1名、70歳代1名、80歳代2名	質的研究	チャットクリスタの作成、デモ機の設置、DVDの閲覧環境を整え実践した結果、酸素になれなかった患者は4名中3名、酸素の効果を感じることができたのは3名中3名、酸素の必要性を理解することができたのは3名中3名であった。酸素に慣れることにつなげた指導として、酸素機器の取り扱い方法などが挙げられた。
12	在宅酸素療法を必要とする患者・家族への不安軽減のための支援 教育パンフレットを用いての指導	70歳男性、間質性肺炎、気胸、肺気腫	事例研究	呼吸苦時に強い不安が生じていたが、1日1回10分程度で教育パンフレットを用いて指導を行い、検温時に不安に思っている内容を確認した。共感を示しながら介入することで、自ら指導されたADL動作や呼吸法を取り入れることができるようになった。患者は入院中に気胸となり、指導は中断。CO2ナナルコースミスにて死亡された。

Literature review on nursing for the introduction of home oxygen therapy in older individuals

Kayo HIRAI, Ryoko HOTTA, Akane KONNO, Naomi YOSHIDA

【Abstract】

Purpose : This study aimed to review the literature on nursing for the introduction of home oxygen therapy (HOT) in older individuals, organize related research interests, and identify issues to be addressed in future studies.

Methods : Using the Ichushi Web database (version 5), we searched for articles using the keywords “home oxygen therapy,” “introduction,” “older people,” and “the elderly” and retrieved 78 articles. Carefully reading the titles and abstracts of the articles, we extracted 12 articles for further analysis.

Results : There were nine articles that aimed to understand and describe the feelings and daily life of patients to whom HOT had been introduced. These studies mainly used semi-structural interviews and qualitative inductive analysis. Six articles detailed the mental aspects of the patients, such as the feelings and conditions when the patients accepted the introduction of HOT, and three articles focused on the experience on medical treatments.

Conclusions : Using checklists and providing interventions regularly, including those for mental aspects, are effective in introducing HOT to older individuals. As an issue of HOT in nursing for older individuals, the findings suggest the importance of examining and improving nursing methods based on the characteristics of older individuals. Understanding the actual living conditions of older individuals and their thoughts may lead to useful ideas for nursing during introduction of HOT and provide opportunities for reflection on the nursing practice.

Keywords: older people, home oxygen therapy, introduction, nursing

Department of Nursing, Faculty of Nursing, Mejiro University